

ケータイ電磁波 WHOが注意喚起

「発がん性の可能性」

世界保健機関（WHO）の国際がん研究機関（IARC）は31日、携帯電話の電磁波と発がん性の関連について、限定的ながら「可能性がある」との分析結果を発表した。耳にあてて通話を長時間続けると、脳などのがんの発症の危険性が上がる可能性があるといい、予防策としてマイク付きイヤホンの使用を挙げている。

▼2面解説
フランス・リヨンで31日まで開かれた作業部会で、五つある発がん性分類で上から3番目の「可能性がある」に位置づけた。IARC分類は、各国が規制措置をする際の科学的根拠となるため、今後、規制議論が始まる可能性がある。ただ、動物を対象にした研究では明確な関係性はないとした上で、今後、長時間携帯を使う人などを対象にした研究を重ね、さらに分析を進めるべきだとした。

31日記者会見した作業部会のサメット委員長（米南カリフォルニア大学）によると、「脳のがんの一種である」神経膠腫（グリオーマ）や、耳の聴神経腫瘍の危険を高めることを示す限定的な証拠がある」とした。一方で、同じく電磁波を出す電子レンジやレーザーを職業上使う場合や、ラジオやテレビ、各種無線通信に日常生活で触れる場合も同様に検証したが、発がん性との関係はないとも結論づけた。

IARC幹部は、メールなどの文字を打つ使用は、発がん性と関連はないと説明している。ただ音声通話の際は「長期的な影響を考えるなら、イヤホンを使うなどの予防策がある」と述べた。（ジュネーブ＝前川浩之）

根拠まだ限定的

（2面） 携帯発がん性 予防へ早めの指摘

〈解説〉世界保健機関（WHO）の国際がん研究機関（IARC）が、携帯電話の電磁波を、「発がん性の可能性がある（グループ2B）」に分類した。ただ、「2B」は発がん可能性があるという分類の中では根拠が弱いレベルで、物質のほか、職業としても消防士やドライクリーニングの

従業員などがこの分類に指定されている。▼1面参照
IARCは多数の論文を検討した上で、「根拠はまだ限定的。さらなる研究が必要」とも言及している。電磁波とがんの関係は、携帯電話が広く使われ始めた1990年代から指摘され、様々な研究が行われているが、まだ確定的な結論

は出ていない。97年にできた総務省の委員会が実施した動物実験や、約430人を対象に行った調査では、携帯電話と脳腫瘍や聴覚神経のがんの発生との因果関係は証明できなかった。それでもIARCがこのような決定をしたのは、少しでも健康に害を及ぼす可能性があるものは早めに注意喚起する、というWHOの「予防原則」からだ。過度に恐れる必要はないが、一方でリスクはゼロでないことを理解することが必要だろう。（大岩ゆり）

発がん性分類



WHOの一機関である国際がん研究機関（IARC）が判断する、人間への発がん性の危険度。①発がん性がある（グループ1）②おそらくある（同2A）③可能性がある（同2B）④あるかどうか分類できない（同3）⑤おそらくない（同4）、の五つの分類がある。③には、殺虫剤や人工着色料に含まれる化学物質など約240が挙げられている。コーヒーも膀胱（ぼうこう）がんと関連で③に分類されている。

月刊日薬新聞（夕刊）
2011年（平成23年）6月1日

<http://monographs.iarc.fr/ENG/Classification/index.php>
[Agents Classified by the IARC Monographs, Volumes 1-101]

- Group 1 Carcinogenic to humans 107 agents
- Group 2A Probably carcinogenic to humans 59 agents
- Group 2B Possibly carcinogenic to humans 266 agents
- Group 3 Not classifiable as to its carcinogenicity to humans 508 agents
- Group 4 Probably not carcinogenic to humans 1 agents